

『凛々たる人生』

— 志を貫いた先人の姿 —

「第十八回」将棋一筋の人生を貫徹した 坂田三吉

東京大学名誉教授 月尾嘉男



坂田三吉 (1870-1946)

あの手この手の 思案を胸に
やぶれ長屋で 今年も暮れた
愚痴も云わずに 女房の小春
つくる笑顔が いぢらしい

吹けば飛ぶような 将棋の駒に
賭けた命を 笑わば笑え
うまれ浪花の 八百八橋
月も知ってる おいらの意気地

明日は東京に 出てゆくからは
なにがなんでも 勝たねばならぬ
空に灯がつく 通天閣に
おれの闘志が また燃える



図1『王将』のレコード (1961)

これは西条八十の作詞、船村徹の作曲による『王将』という演歌の歌詞であるが、戦後を代表する演歌歌手

時代の石器や縄文時代の土器が出土する歴史のある地域であるが、三世紀から七世紀にかけての古墳時代になると、仁徳天皇の陵墓とされる日本最大の古墳(図2)をはじめ多数の古墳が造営されるなど、古代から繁栄していた地域である。さらに一一世紀から一六世紀の中世には自治都市として中国や南蛮などとの交易の拠点となり、江戸時代には商業都市として発展した。

の村田英雄の歌唱で一九六一年暮れにレコードが発売され、一五〇万枚以上も売れたほど流行した(図1)。内容は明治時代から昭和時代にかけて活躍した伝説の棋士の坂田三吉の人生を題材にしたものであるが、歌詞は坂田三吉という異才の生涯を見事に要約している。この天才棋士を今回は紹介したい。

極貧の草履職人の家庭に誕生

大阪市の南側に隣接する堺市は古代の石器



図2 仁徳天皇陵墓

しかし、明治時代になると紡績産業や煉瓦産業が立地するようになり、阪神工業地帯の一角として転換しはじめるが、そのような時代の一八七〇(明治三)年に堺の下

町の極貧の家庭に誕生したのが坂田三吉である。父親は草履を製造する職人で、三吉も子供の時代から家業を手伝っていたが、江戸時代からの下町の風景に登場するように、夕方になると長屋の住人が街角の縁台で素人将棋をするような環境であった(図3)。



図3 明治時代の堺

三吉も縁台将棋に参加するが、学校教育の機会もなかった文盲のため「駒」の文字も理解できず、文字の形状で王将とか飛車を識別し動作も暗記した。まさに無学文盲の草履職人で近所でも目立たない子供であったが、

何故か将棋には天性の才能があり、評判の腕前になった。一八八六(明治一九)年に大阪市日本橋の履物問屋に丁稚奉公をするが、将棋に夢中になって子守をしていた問屋の子供に怪我をさせ、解雇されてしまった。

家庭に頼着せず将棋に熱中

仕方なく出戻った堺では相変わらず家業の草履製造を手伝いながら将棋に熱中する状態であったが、素人としては相当の腕前のために近隣では次第に評判になり、一八九一(明治二四)年に当時は四段(一九二一年に三世名人)であった職業棋士の関根金次郎(図4)と市内の有名な料亭で対局する機会があった。当然のことながら勝負は坂田の惨敗であったが、これに発奮し、ますます将棋に熱中していった。

図4 関根金次郎(1868-1946)



一九〇三(明治三六)年になって、すでに素人ながら四段の実力とされていた坂田は七段に昇

図5 坂田「ユウ」



将棋大会が開催されると情報を入手すると、大阪より強豪が存在するかもしれないという期待から、女房の反対にも躊躇せず岡山へ出掛けるような状態であった。演歌『王将』の二番には「愚痴も云わずに女房の小春／つくる笑顔がいぢらしい」という歌詞があるが、そのような綺麗な状況ではなかった。

格していた関根と二枚の「香落ち」と「角落ち」で対局をした。この対局の棋譜は保存されており、一勝一敗であった。この対局を契機に坂田は職業棋士になることを決意し、その当日、家内のコユウ(演歌『王将』では小春)(図5)に決意を伝達する。すでに二人には何人もの子供がある状態であったが、坂田の決意は変化しなかった。

無職の坂田に安定した収入はなく、コユウが子供を背負って日雇い仕事をするギリギリの生活であったが、坂田は頼着せず、岡山で

コユウは坂田が長年思慕していた人妻であり、離縁した時期に坂田と結婚した。二人には四男三女が誕生するが、坂田にはほとんど収入がないためコユウは日雇い仕事をして日銭を確保するが、その程度では食料も満足に購入できず極貧の生活であった。ある時期に何日も坂田から消息がないので、コユウは子

供を道連れに鉄道自殺を覚悟するまでになるが、事情を理解できない子供の可愛い笑顔のため決意でさず餓死寸前の状態で帰宅した。帰宅した長屋には将棋大会から帰宅し、景品を山積みにした部屋に坂田がいたが、女房も子供も何日も食事をしていないため死人のような状態であり、坂田は幽霊が登場したと勘違いし「堪忍してくれ、成仏してくれ」と哀願するという事件もあった。これによって坂田は家族の大切さに気付き、家庭にも気配りをするようになるが、将棋を断念することはない、依然として各地へ出掛けて将棋をする日々であった。

大阪と東京の棋界の交流

将棋の実力は次第に世間の評判となり、坂田を職業棋士にしてやりたいと支援する人々

当時は関西と東京の棋界は交流が希薄であったが、坂田は一九一三（大正二）年に東京に最初の訪問をし、築地倶楽部において歓迎対局が開催され、関根八段の「香落ち」で対局して勝利している。この実績により坂田は正式に七段に認定された。さらに七月には関根八段が大阪を訪問し、大阪朝日新聞主催により対等の条件で坂田と対局して坂田が勝利している。翌年も大阪で関根八段と対局したが、今回は敗戦であった。

将棋の歴史で最高の勝負

以後は大阪だけではなく東京で対戦する機会もあったが、一九二四（大正一三）年に「東京将棋連盟」が結成され、それに貢献した大崎熊雄や金易二郎など何人かの関東の棋士が「八段」に昇段して一気に人数が増加した

も登場するようになった。その一人の大阪の会社社長の加納樽太郎が坂田の世話をしてくれた。その効果もあり、一九〇七（明治三九）年に神戸新聞が八段の関根金次郎、小菅剣之介、井上義雄と坂田の四人の対局を企画し、当時は六段程度の實力とされた坂田は香車の一枚を落とした「香落ち」の小菅と対戦して勝利し、次第に有名になった。

さらに一九〇八（明治四一）年には大阪朝日新聞の囑託となり、一定の収入があつて生活が安定するとともに人格も成熟していくようになる。これらの実績を背景に、一九一〇（明治四三）年に坂田が中心となって「関西将棋研究会」が発足し、これを契機に坂田は大阪朝日新聞紙上に「自分は七段の實力があるため自分で七段を認定する」と発表し、さらに「認定に異議があれば何時でも手合わせをする」と宣言した。

ため、関西でも伯爵で第一生命保険の初代社長になる柳澤保恵伯爵（図6）の支援もあり、翌年の一九二五（大正一四）年に坂田は「名人」という称号を名乗るようになった。その大恩に坂田は生涯感謝していたとされる。



図6 柳澤保恵（1871-1936）

このような状況のとき、支援していた大阪朝日新聞と金銭の関係で問題が発生し、坂田の大

阪での立場が微妙になっていく。さらに一九三六（昭和一一）年になって何人かの大阪の棋士が現在の日本将棋連盟の基礎となる将棋大会に参加したため、坂田は孤立状態になるが、翌年になって金易二郎が仲介して坂田も将棋大会に参加できることになった結果、日本の将棋の世

図7 木村義雄（1905-86）



界が統一される
ことになった。

坂田が連盟に
復帰したことを
記念して一九三
七（昭和一二）年

二月に「南禅寺の決戦」として記録される対局が実現した。東京の下町の草履職人の家庭に誕生したという坂田と似通った境遇の三三歳の木村義雄（図7）とすでに六七歳になつていた坂田との対戦である。対局は京都の南禅寺（図8）で実施され、三〇時間という異例の持ち時間の勝負で先手の木



図8 南禅寺（京都市左京区）

情報社会で評価されるべき人物

坂田には様々な逸話がある。有名になると揮毫を依頼されるようになるが、いつも揮毫するのは「馬」という一字だけであつた（図9）。有名な「邑に不学な戸なく家に不学の人なからしめんことを期す」で開始される学制が發布されたのが、一八七二（明治五）年であり、その二年前に極貧の家庭に誕生した坂田は学校に通学をしたことのない無学であり、好きな「桂馬」の一字の「馬」のみの習



図9 坂田の揮毫した色紙

字を練習して揮毫していたのである。
レストランで食事をするときもメニューの文字が理解できないので、他人のテーブルに近付いて品名を質問したり、ボーイに推薦する料理を質問したりして選定していた。子供の時代から金銭で苦勞した経験の反動で服装には気配りをし、いつも裏地には「馬」と「三」の文字を記入した紋付の羽織を着用していた。さらに金銭で苦勞している周囲の人々や若手の棋士には支援をしており、気配りの人士でもあつた。

日本は江戸時代にも武士階級は藩校で、庶民階級は寺子屋で初等教育を享受しており世界有数の教育国家であつたが、明治時代以後は国家が教育制度を整備し、現在ではOEC D（経済協力開発機構）諸国で二位の学力を維持している。しかし、坂田の人生を回顧してみると、一般の基準では無学であるが、将

村が勝利するが、「三七〇年にもなる将棋の歴史で最大の一歩」とされる勝負であつた。

棋の世界では突出したどころか日本最高の能力を発揮している。これは今後の日本の教育に重要な意味のある特徴である。

世界規模で情報社会が進行しているが、情報の最大の価値は相互に相違することである。同一の内容の情報に社会に氾濫しても重要な意味はない。日本は江戸時代以来、社会の底辺を底上げする教育を推進し、日本を世界有数の工業国家にすることに成功したが、情報社会に移行した現在では異質の人々を評価する別種の基準が重要である。そのような視点から異質の人生を貫徹した坂田三吉は見直されるべき人物である。

つぎおよしお

一九四二年生まれ。東京大学工学部卒業。工学博士。名古屋大学教授、東京大学教授、総務省総務審議官などを経て東京大学名誉教授。専門は通信政策、仮想現実。趣味はカヤックとクロスカントリースキー。著書は『縮小文明の展望』『先住民族の観智』『転換日本』『凛々たる人生』『爽快なる人生』『意志ある人生』など多数。